

保育所の国家予算と私たちの立場

秋 田 美 子

正月気分が抜けきらぬ一月八日でした。今年の保育所予算の大幅削減があるらしい、関係者は容易ならぬ事態に処していくための対策を早急に実施しなければ、というニュースです。その内容は翌九日の大蔵省の第一次内容案として明らかにされました。要求予算の二分の一であり、昨年度（昭和32年度）より六億五千万円、すなわち約三割減という不当な削減振ります。その日以来、十六日間にわたって連日連夜、全国にわたって社会福祉協議会、保育園長、保母、母親は勿論のこと、四〇団体以上の協力団体の応援を得て、国民運動的な規模をもった、保育予算獲得運動をつづけたわけです。

その間、国会に、各政党の本部に、自民党政調会に、大蔵省、

厚生省の各関係者、首相官邸に、各地出身代議士邸にとあらゆる方面にわたって、陳情運動を寸断なく続け、事態の打開のために疲れた仕事の間を縫い、夜間遅くまで全力をあげて努力してきました。地方代表も北は東北から南は四国・九州にわたって、ほとんど全国各県から上京されて、これまた猛烈な運動に血のにじむような努力をつづけられました。今年の予算案の不評なことは、すでに皆様御承知のとおりですが、私たちはこの運動を通じて日本の政治の方向や為政者や大蔵省の考え方をかなりはつきり知ることが出来ました。

この運動を通じて私たちの非常に強く感じたことは幾つかありますが、とにかく私たちの納得出来るような方向に国の政治が動

いていくことを今後も期待することは、手をこまぬいている限り絶対むずかしいだろうということを、この運動に関係した者が一人残らず心に銘じたことです。児童憲章・児童福祉法と法律は現にありながら、それが空文化しかねない状態にあることが、かなりはつきり解ってきました。

軍人恩給の問題などと比べて何と甚しい仕打ちなのかと、物云わぬ子どもたちのために涙を流しながら抗議し、子どもに代って人間としての権利を主張しつづけてきた私たちの運動は、心ある政治家や報道機関や世論に助けられ、支えられて、ようやく一応の復活をみるものが出来ました。報道機関の取材メモをみても、神武以来という表現がいつわりでないほどに採り上げられています。

私たちの動きが演出的だとか、厚生省の指令による予定活動であるとかいう評価も残念ながらあったようですが、大部分はこの措置に対する国民的な抗議としての傾向を示していました。一月十四日の「保育所をまもる国民大会」は氷雨降る日比谷音楽堂に開かれ、この運動の最も結集化された形として出されたものです。あの天候の中に三〇〇〇名の動員がなされたことは、一同の決意が如何ほど堅いものであったか想像していただけることと思います。その後国会開会まで断えず続けられた運動も、単なる公

憤や怒りを打ちまけるだけでは駄目なのだということを自覚した関係者の協力による多面的な活動でした。

けれども結果は決して満足すべきものではありませんでした。給食費の一円値上げと民間施設の保育さんがたの期末手当が〇・五パーセント新規予算に組まれたものと摺り代えに、措置費で総額約一億円の減になって議会上程されるわけです。

これでは保護者の負担が増し、今でも保育所利用の家庭の経済事情は苦しいのが更に強くなって、一部負担の人にしても、全額負担にしても、容易に保育所に子どもを託されないという奇妙な結果を生じるようになります。すなわち、全額を免除される階層と全額を負担できるような家庭を除いては、母親の勤労や疾病によつて保育に欠ける子どもたちは保育所入所が経済的な面からむずかしくなるということはある意味で保育所の幼稚園化への傾向を強めてしまうのではないのでしょうか。

昨年度の会計検査院や行政官理庁の監査報告を資料に大蔵省の原案が作成されたと聞いておりますが、大きな汚職事件があいまいな結末のままに見過されている中で、多少のとりあつかい上のそこから国費使用の不適正が発見されたとしても、このたびの措置は何といっても私たちにはなっとくいきません。

現在の保育所の措置児は園長に入所させる権限はないのですから、適切でない入所児童が発見されたり、措置費の適正な徴収がされていないとしても、その責任を保育所側や保護者の上に皺よせされることはお門違いの処置だと断念せざるを得ません。また一般には保育所は非常にやすい措置費で預かってもらえる上に、公費がかなり多額に使われているのだという概念があるようですが、これも誤解で、先日の新聞にもありましたように、母子家庭で親子二人の家族の場合、母親に月額九千二百円の収入があると保育料は千円位を徴集されるようなしくみなのです。

かほどに厳しい保育料の定め方や百円刻みの複雑な徴収基準がかえって監査の指摘資料になったようなケースを作ってしまったとも云いえるのです。勿論、私たち関係者もお互いに自省的な態度で、大蔵省による削減の口餌を与えないように自戒することも必要だと思えます。すなわちするべきことをして、云うべきことを云う強い立場を固めながら、後退の傾向にある児童福祉予算の確保に、今後も一段の努力をつづけなければと考えております。けれどもここ二・三年来の大蔵省の保育所に対する考え方は、昔日の託児所にかえしてしまおうとする方向が強められてきていますので、この点は大いに警戒しなければ、毎年復活運動を強化し

なければならぬことにもなりかねません。全国八千の保育所の配置の不適正とか、無認可施設の漸増の傾向、幼稚園入園児の一般的減少、中小企業関係者の生活の不況化などの条件がからみ合った中におかれている保育所の問題は、予算削減の口実を与えない困難な事情をはらんでおります。

さればと云って諸外国に比べて日本の社会福祉予算、殊に児童福祉予算が予算総額の中で尊重されていないことは衆知の事実です。これを更にふくらませる方向をとることは考えられても、後退させることは出来ないということを世論の支持をえて、強く訴えていかなければなりません。そのためには大蔵省の保育理論の打開と国会議員に保育所の実態を理解してもらうこと、一般社会のかたがたに正しい保育所の在り方を検討してもらうことなどが並行的に進められるような対策と運動が打ち出されていかなければならないと思えます。

私たちは今年の運動をふり返ってみて、余議なく、追いつめられてやったことは云え、決して良かったとか、巧くいっただなどという勝利感や優越感をもってはいないのです。むしろこのようなことをしなければならぬ現実に対して憤りと悲しみを強く持った、というのが参加した多くの母親や保育者の、素直な気持

でしょう。

「来年はもうこんなことは繰り返したくない」

「こんなことまでしなくては保育所予算がバサバサ切られるなんて、私たち子どもに死んでもかまわないと考えておられるのかしら」

と涙を流している母親もありました。

私たちは労働時間も長く、人手も少ない中でこのような運動をすることは、非常にむりがあり、今回も何人かの犠牲者(病人)を出しましたが、止むに止まれぬ気持で頑張ったという実態を世の多くのかたがたに理解して欲しいと強くねがっております。

「曲り角に來た保育所」とか「十字路に立つ保育所」とかいふことばと共に「保育所の幼稚園化」が云々されている一方、「幼稚園の保育所化」が問題になっているようです。戦後十二年、保育所は児童福祉法により運営され、幼稚園は学校教育法の一部として運営されてきて、監督官庁も厚生省、文部省にわかれ、それぞれ全国的にその数を増してきて、それぞれ地域の需要を充ててきたわけです。

ところが近年になって施設の増加と入所児童の漸減、適正でない配置、経営者や母親たちの一部の誤まった観念などの条件が重

なり合って、それぞれの施設に問題が起り、お互いの関係は混乱をましていて、それが世評にのぼり、多少の批判を受けていることも認めなければなりません。そこで今後の就学前の幼児の施設はこのままで良いのかという、新しい考え方、以前にあった一元化論とは違った見解にたつてポツポツ提唱され出したようですが、まだ表面化したものではなく、そこまで行きつくためには幾つかの段階が必要でしょう。

このような意味で保育所も幼稚園も普及し、数がものを云うところまでできましたが、またそれだけ世間の風当たりが強くなった面もあります。

予算の問題はやはり国が子どもたちのしあわせをどのように考えているかということを見るためのバロメーターになるわけで、私たち保育関係者が対立意識などという狭い感情の中でモタつている間に、お互いに足元を崩されてしまうような愚は、同じ日本の子どものしあわせを進めていく仕事をしている者として絶対に防いでいかなければと考えております。